

⑥ 長原孝太郎の死去

「学校近事」(49頁)にも記されているとおり、昭和五年十二月一日に西洋画科教授長原孝太郎(号止水)が死去した。止水は同年の帝展に「明星」を出品し、その後明治神宮聖徳絵画館の壁画を制作中であった。葬儀は三日に本郷動坂町の自宅で行われ、十七日西洋



長原孝太郎
『東京美術学校校友会月報』第29巻第6号より転載)

画研究科有志
発起による追
悼の集いが催
された(『東京
美術学校校友
会月報』第二十
九巻第七号「芸

苑彙報」欄)。
長原は西洋画基礎教育課程の指導者として生徒に親しまれた。次の回想記にもそれがよく現れている。

或日のこと

野間仁根 大正十四年西洋画科卒

〔字備料〕
子科一年と言ったと思うがその頃級友諸君の如く時間通り眞面目に教室で石膏写生などは得手ではないからピンポンを遊んだりモデル嬢とふざけることの方が多かつたのである、或日のこと、さんざ遊び疲れてから教室えはいつて行くと級友は皆ポカンとしている。

おい野間、大変だ。今長原先生が来られてお前の絵を賞めて行かれたぞ、というのである。

そうだろう俺の絵は良いからなあ、それ位のことは平気で言う程は恐いものなしの楽道家だったのである、そんなことがあつてから或日のこと先生は次の様に教えて下さったのである。

「お前の描くデッサンはとてもなつてない形も変だし調子も間違っている、しかしなにかお前の感ずるところを描いているのは正しいことだと思う、いづれ絵のことだから段々うまく描けるようになるだろうが、この氣持を忘れるなよ、絵とはこうしたものなんだよ、歳とつても忘れるなよ」

こうして、この変な妙チクリンなデッサンについて、絵の根元のことにも及んで懇切に教えて下さったのである。そして今もなほ先生の御恩に感銘して忘れないつもりである。

二科会に夜の床という当時では大きな画布だったが、この絵が入選した時、先生が非常に激賞して下さったので、なにより私は先生のお氣持がうれしく感泣したことである、これは寺内万次郎氏を通じて聞き知ったことであつた。

(『芸術大学新聞』第七号。昭和二十六年四月十五日)

⑦ 下村観山の死去

昭和五年五月十日、もと本校教授下村観山が死去した。『東京美術学校校友会月報』第二十九巻第二号には旧友島田佳矣、溝口宗文、六角紫水の追憶談が掲載され、文庫では六月十三日から二十日まで観山の本校卒業前後の作品と横山大観、関保之助、溝口宗文、島田佳矣、白浜徴、鈴川信一、天草神来、菱田春草、西郷孤月ら同窓生の作品を陳列した。なお、翌六年二、三月には東京府美術館で